

# 佐世保の戦国武将達は どこからやってきたのか

佐世保  
遺跡  
レポート

私達の住む佐世保で戦国時代を生きていた武士達はどこからやってきたのでしょうか。

佐世保に古くからいた豪族のほとんどが、もとを辿れば**松浦党**といわれる一族から初期の段階で枝分かれしてきた人々だといえます。室町時代になり佐世保の地にやって来たのは**宗家松浦**でした。もともと今福の**梶谷**に居館を構え、**松浦党**の宗家として今福の地を領していました。ところがある時期から**相浦**の地へと本拠地を移します。その理由は様々なことが言われていますが、外交貿易に適した土地探しと、**平戸松浦**の勢力拡大を懸念してとの説が有力です。この宗家松浦の佐世保進出により、それまでいた地元の豪族達の運命は大きく変わっていきます。そしてこの頃から佐世保を舞台にした下松浦最大の2つの勢力が他家を巻き込んでぶつかり合う、佐世保の戦国時代へと突入していくのです。

## <松浦党とは>

それでは松浦党とはどういった人達なのでしょうか。正式には**まつら党**と言います。松浦は中国の歴史書の一部**魏志倭人伝**(280~297年)にも登場するほど古い地名で当時は**末廬国**と呼ばれていました。

その勢力範囲は長崎県北部から佐賀県西部そして壱岐五島にかけてです。出自については安部宗任の末孫説などもありますが平戸松浦家の正式な家系図で嵯峨源氏としてあり、一般的に**嵯峨源氏説**とされています。

平安時代末期に派生した松浦党ですが、源平争乱においては当時の九州が平家の拠り所であったこともあり当然平家を名乗ります。ですが**壇ノ浦合戦**では源氏側に寝返ったと伝えられています。

鎌倉時代になると日本で初めての海外からの侵略、**元寇**が起こります。この戦いでの活躍で松浦党の名声は上がったものの、幕府からは思ったような恩恵は受けられませんでした。松浦党のひとつの特長に党を総括する中心的な人物が見あたらず、それぞれが独立した、まとまりのない集合体であったことがいわれます。

室町時代になるとリーダー不在の状態は更に混沌化し外部からの参入などもあり、上松浦から下松浦へと勢力が拡大していきます。そんななか一族の調和を図り、数回に渡り**一揆契諾状**を結んでいます。

ところが個々に力を持ちだした松浦党は、ついにそれぞれが激しく対立しあうようになってしまいます。

戦国時代も終わりを迎える頃、各松浦党を併合して巨大化した、**平戸松浦(下松浦)波多氏(上松浦)**が唯一の戦国大名として生き残ります。しかし波多氏は豊臣秀吉によって取り潰されてしまいます。一方平戸家は**朝鮮の役**でも活躍し、**関ヶ原合戦**では最終的には東軍につきますが、「一時は西軍についた裏切り者」との疑念を払拭するため、自らの居城を焼くなどの外交力を駆使して、徳川家の信頼を得て松浦党で唯一、大名家として生き残り江戸時代を迎えました。



## < 松浦党系図 >

### ■ 桓武天皇 (737-806)

4子

- 第50代天皇
- 794年。奈良から京都へ都を移す。平安京

### ■ 嵯峨天皇 (786-842)

18子

- 第52代天皇

### ■ 嵯峨源氏 (源融) (822-895)

1子

河原昇

1子

箕田任

1子

源宛

1子

### ■ 源綱 (渡辺綱) (953-1025)

通称: 渡辺源次

奈古屋授(源次授、渡辺授)

- 源宛の子として武蔵国足立郡箕田郷(現・埼玉県鴻巣市)に生まれる。
- 摂津国(せつつのくに)<sup>\*1</sup>渡辺に住んだことで渡辺を名乗る。
- 鬼退治伝説で有名な源頼光(みなもとのよりみつ)四天王の筆頭。
- 正暦元年(990年)源頼光が肥前守に任ぜられ松浦郡に下向した際に綱を同伴してきた。この間に綱は奈古屋で授という男子をもうけ、地名から奈古屋授(源次授、渡辺授)と名づけた。その後、綱は任期を終えて正暦五年(995年)に帰洛した。

### ■ 源久 (渡辺久) (生没年不詳) (松浦久)

- 延久元年(1069年)、松浦郡宇野御厨の荘官となり、松浦、彼杵郡及び壱岐の田およそ2230町を領有して今福の梶谷に居館を建て(現:梶谷城跡)。
- その後、松浦久と名乗り、次いで検非違使に補され、従五位に叙された。
- 源太夫判官と称して松浦郡、彼杵郡の一部及び壱岐郡を治め、ここに肥前松浦党の歴史が始まる。

奈良時代<710~790年>

平安時代<794~1191年>

※1 現在の大阪府の北西・南西部と兵庫県の東部を占めた旧国名

